

スケーリング・クエスチョンとその深化

——「数」による査定から「点」と「線」のデザインへ——

三 谷 聖 也

要旨：本研究は、ソリューション・フォーカスト・アプローチの一技法であるスケーリング・クエスチョンの治療機序を解明すべく、既出の仮想事例を再考察したものである。先行研究では「数による査定」「言語による行動拘束」という治療機序が指摘されているが、本研究ではスケーリングの「スケール」の側面および「スケール」から数値を捨象した「点」「線」という構成要素との関係から検討する。方法はスケーリング・クエスチョンが用いられている二事例の面接過程の一部を抽出し、心理臨床および点と線のデザインの観点から考察を加える。点と線に関する考察は抽象絵画の提唱者であるヴァシリー・カンディンスキーの絵画理論に依拠している。事例の考察では、スケーリング・クエスチョンは、例外の探索というプロセスに先んじて、点と線との関係をめぐる対話からクライアントの「再定位」がもたらされることが示唆された。この「再定位」の感覚はソリューション・フォーカスト・アプローチの一技法に留まらず、心理臨床全般における普遍的な要素であることが示された。

キーワード：スケーリング・クエスチョン、スケール、点、線、再定位

I. 問題と目的

心理面接ではこころの世界を探求するために「言語」が用いられる。精神分析に由来する心理療法ではクライアントが使用する「言語」を手掛かりにクライアントの無意識の世界へと迫っていく。セラピストの力量にもよるが、時に言語のみでは十分な理解に至らず、誤解が生じることもある。言語のみで内的世界を共有することには困難さが伴うのである。共有の困難さはセラピスト側の要因だけではない。クライアントは言葉では言い表しがたい思いや葛藤を、症状や問題という形で訴えているからでもある。共有可能性を高めるべくセラピストたちは、描画や箱庭などのイメージ、遊びなどの非言語的な媒介を用いて、クライアントの無意識の世界へとアクセスし、言語の不完全性を補ってきた。

イメージや非言語のほかに「数」を用いるアプローチも開発されている。エゴグラムや YG 性格検査などの質問紙法の検査では、こころの状態を数値化することで自己理解が目指される。認知行動療法では不安階層表を用いて、不安のレベルを点数化するアプローチがとられている。ブリーフセラピー MRI 派のリフレーミングの技法には、数量化や順位付けが用いられている（長谷川, 1987）。ブリーフセラピーのミルウォーキー派のソリューション・フォーカスト・アプローチでは「スケーリング・クエスチョン」と呼ばれる「数」を用いる質問法が開発されている（Breg,

I.K., & Miller, S.D., 1992; Berg, I.K., & de Shazer, S., 1993)。スケーリング・クエスチョンでは直感的なままで整理されていないクライアントの経験を数値で表現させ、クライアントの観察、印象、予測などを0~10の尺度に置き換える (DeJong, P., & Berg, I.K., 1998)。標準的なスケーリング・クエスチョンのプロセスは、下記の引用の通りである。それを図示すると Figure 1 の通りとなる。尚、ここに登場するピーターはセラピスト、アー・ヤンはクライアントである。

ピーター：アー・ヤン、いまからちょっと変わった質問をしようと思うんだ。それはスケーリングといって0から10の目盛りを使う方法で、0はあなたが私の所に予約を入れた時のパニック状態、10はあなたがさっき話していた奇跡の状態だとすると、今日あなたはその目盛りでいうとどのあたりだろう？

アー・ヤン：そうね、6ぐらいかしら

ピーター：6だって？ 冗談でしょう。それはかなり高いね。0から6になったということはなにが違ったってことなのかな？

アー・ヤン：私はじっとしてられないの。何かをしてないと……ここへきて私のどこが悪いのか知りたいというのもそうだけど。

ピーター：ここに来る他に、どんなことで6になったんだろう？

アー・ヤン：義妹と話をしたわ。彼女は「話したことがあれば何でも話して」といってくれるので話をしたし、外へも出るようにしてるの。

ピーター：だから最近あなたは前より外へ出るようになったんだね。

アー・ヤン：ええ、週末には夫や子どもたちと、湖なんかに。

ピーター：他には？

アー・ヤン：ええ、以前よりもっとお祈りするようになったわ。

このようにセラピストはスケーリング・クエスチョンという数を用いた質問法を用いることにより、クライアントが問題にとらわれていない「例外」の状況をより細やかに引き出すことができるのである。このスケーリング・クエスチョンは、ソリューション・フォーカスト・アプローチのなかでも、もっとも頻繁に用いられる技法 (Skidmore, J.E., 1993)、もっとも役立つもの (Lloyd, H., & Dollos, R., 2008) であると評価されており、ソリューション・フォーカスト・アプローチを一躍有名にさせた代表的な技法でもある。本技法は使用頻度が高くもっとも有用であることか



Figure 1. 標準的なスケーリング

ら、本技法の治療機序を詳細に検討することで、心理臨床の発展に資する可能性があるものと考えられる。

数による査定

スケーリング・クエスチョンを使うと「クライアントに彼らの問題、優先順位、成功、対人関係の情緒的な重要性、自己評価のレベル等を数のスケール上で表すように求めることで、そんな事柄について、ずっとよく査定することができる」「関係性の査定に有効である」「問題の深刻さを査定するのも使用できる」「治療の進展の評価は、常に進行中のプロセスであり、治療の過程を通して絶えずモニターされる」(Breg, I.K., & Miller, S.D., 1992) ことが指摘されている。このようにスケーリング・クエスチョンはセラピストがクライアントの内的状態を理解するのを助け、治療の進展をリアルタイムで評価できる査定の道具として優れていることがうかがえる。さらにそれは、クライアントにとって理解しやすいものであり、治療目標の達成や状況改善に気づくのを助けてくれるのだと説明されている (Estrada, B., & Beyebach, M., 2017)。スケーリングはクライアントの生活の複雑な側面を具体的でわかりやすくするという意味で臨床家とクライアントの双方に役立つ技法なのである (DeJong, P., & Berg, I.K., 1998)。

言語による行動拘束

スケーリング・クエスチョンには「数による査定」のほかにも、「言語」としてのユニークな特徴を有している。ブリーフセラピーの言語観は、他の心理療法とは一線を画するものである。個人療法の多くがクライアントの用いる「言語」を分析するのに対して、ブリーフセラピーではセラピストの用いる「言語」のほうに力点が置かれる。しかも一般に言語の機能は、思想、考えの伝達というふう理解されるが、そうではなく言語による行動拘束に注目するのである (長谷川, 2005)。言語による行動の拘束とは「任意のメッセージは、その受け手の反応の選択幅を小さくする」という性質のことである。とりわけソリューション・フォーカスト・アプローチでは、セラピストの用いる「質問」に工夫が凝らされている。スケーリングは情報を与えると同時に、動機を高め、激励し、変化のプロセスを促進させるようにデザインされている (Breg, I.K., & Miller, S.D., 1992) のである。質問は一般に情報収集に用いられるが、ソリューション・フォーカスト・アプローチでは質問それ自体がクライアントに影響を与えるというスタンスを取っている。たとえば「最悪を 10 点とした場合、今何点ですか」という質問は、10 点の状態を下げることができる力をあなたは備えているというメッセージが暗示されている「前提のある質問」なのである。0 点から 9 点と答えたとしたら、どうやって 10 点の状態を下げられたのですかと問うことができる。一方、10 点と答えたとしても、どうやってそんな最悪の状況を乗り越えてこられたのですかと問うことができる。すなわちクライアントが何点と答えたとしても、クライアントは自身には解決の力が備わっていることを表明してしまうという拘束がなされる質問なのである。

る。このような「言語による行動拘束」の力を用いて、クライアントの込み入った困難な状況からの脱却を支援していくのである。

スケールとしての効果

ここまで先行研究を基にスケーリング・クエスチョンの「数による査定」や「言語による拘束」という治療機序について検討を加えてきた。しかしながらスケーリング・クエスチョンは、単なる「数」を含む質問ではなく「スケール（尺度）」による質問という点にも特長がある。数直線上でもっとも当てはまる数字をクライアントに回答してもらう尺度としての性質を有しているのである。このスケーリング・クエスチョンの「スケール（尺度）」としての効果に関しては、クライアントの治療への取り組みが絶えず変動し変化しており、治療の進展をモニターし査定する（Breg, I.K., & Miller, S.D., 1992）ためであることが示唆されているが、いまだスケールの効果は十分には解明されていない。

ここでスケールを要素に分解してみると、それは「数直線」と「数値」になる。数直線である線分には「起点」と「終点」があり、これらはそれぞれスケーリングにおける「最小値」と「最大値」にあたる。「数」の効果は前述の通りであるため、ここで数直線から数の概念を大胆に捨象してみることにしたい。そうすると、残るは「点」と「線」という図形あるいはデザインの要素に抽象化されるのである。スケーリング・クエスチョンは前景化しやすい数値の情報に目が行きがちであるが、改めて見てみると「点」「線」という構成要素が背景に存在していることがわかる。

そこで本研究ではスケーリング・クエスチョンを「点」と「線」という構成要素から読み解くことで、スケーリング・クエスチョンの技法としての深化の可能性、ひいてはソリューション・フォーカスト・アプローチの一技法の範疇を超えた心理療法における普遍性を探求することを目的とする。

II. 方 法

分析方法は複数の仮想事例の提示による事例研究法の手法によって行う。事例の選定はスケーリング・クエスチョンが発展的・応用的に用いられている面接のやり取りが含まれることを条件に行われた。これらの事例はいずれも既出の仮想事例（三谷, 2019; 三谷ら, 2012）の再掲である。三谷（2019）ではスケーリングの数値を「時間」に置き換えた変種が紹介されているが、考察に関しては例外の探索手段としての考察に留まっている。三谷ら（2012）では数値を用いない簡略化されたスケーリングが記載されているが、ここではローカルな言語の使用や比喩の効果という観点からの考察が加えられているのみである。いずれもすでに技法としての深化がなされていたが、ブリーフセラピーの観点からの考察の域を出ないものであった。

再掲時の考察にあたっては、心理臨床の観点に加えて、「点」と「線」というデザインの構成要素の観点から治療機序について新たに検討を加えていく。前者についてはブリーフセラピーを内包する心理臨床全般から検討し、後者については、ヴァシリー・カンディンスキーの絵画理論を援用する。カンディンスキーは抽象絵画の提唱者であり無駄な装飾を排除するデザイン合理性を追求した芸術教育機関であるバウハウスの教官を務めた人物でもある。『点と線から面へ』(Kandinsky, W., 1926) という著作では絵画の構成要素である点や線について徹底的に分析がなされ、理論的・科学的な吟味がなされている。点や線が持つ本源的な力を把握し、それらが平面上におかれたときに、それらが共鳴し生きた作品になると論じられている。

事例の記載にあたっては事例部分を斜体で表記しクライアントの発話を「」, セラピストの発話を<>で示す。尚、事例はいずれも個人情報に配慮し改変が加えられている仮想事例の再掲であり、特定の個人の情報を記載したものではない。

III. 結 果

仮想事例 1 (三谷, 2019)

この仮想事例は、息子の家庭内暴力を主訴に来談した母親の初回面接の一部である。

転居してきたばかりの父母子の三人家族。父母はそれぞれ新しい仕事を始め、小学校高学年の息子も新しい小学校に転校することになった。転居から一か月後に息子が母に暴力をふるうようになったという。母からの申込により面接がスタートする。母は暴力がいかに深刻であるかを涙ながらに語る。気づくと面接時間の半分以上が経過していた。セラピストはクライアントの語る問題の深刻さに十分に共感したうえでとここで息子さんが暴れている時間は1日何分ぐらいですか?>という質問を投げかけた。クライアントは少し考え「10分ぐらいです」と返答。その後また何かを考え始めるような様子であった。セラピストは<ということ、23時間50分は暴れないで過ごせているのですね、どうやって暴れずに過ごせているのですか?>と質問を続けた。しばらくの沈黙の後「実は暴れない日もあるのです」とクライアントはゆっくりと語り出した。セラピストは<その日のことを詳しく教えていただけますでしょうか?>と身を乗り出して好奇心を持って尋ねた。すると「そういえば、息子より私のほうが早くに帰宅できたことがあって、その日は暴れなかったと思います」と例外のエピソードが語られたのである。家族で話し合い帰宅時間を調整することで問題の解消につながった。

仮想事例 2 (三谷ら, 2012)

この仮想事例は東日本大震災の被災学校で学校カウンセラーとしてソリューション・フォーカスト・アプローチによる支援を行った事例集からの一部抜粋である。

命が助かったこと、ひとり被害が少なかったことに、罪悪感や自責の念(サバイバーズ・ギ

ルト)を抱き、苦悩する女性教師。もっとつらい人がいるのだから、自分が頑張らなくてはと、献身的な仕事を続ける。学校カウンセラーは燃え尽きを心配し、彼女にこんな言葉を届けた。〈罪悪感や自責の念を抱くのは自然なこと。ただそのとらわれが強いつき、ちょっとした考え方の転換が必要。被害の大小を他者と比較するのではなく、ご自身の人生のものさしで考えてみる。通知票で言うならば相対評価ではなく、絶対評価のほう。今回の震災はこれまでの人生の中でどれくらいの体験でしたか?〉と。彼女は唯一無二の被災体験に向き合い始め、少しずつ自分のペースを取り戻していった。

IV. 考 察

結果で示された二つの仮想事例を心理臨床の観点および「点」および「線」というデザインの要素から考察していく。カンディンスキー(1926)は『点と線から面へ』という著作で、点こそが絵画の根本的要素であることを主張している。点の特徴は線との関係も含め次のように説明されている。

幾何学の線は目に見えない存在である。それは動く点の軌跡であり、その所産である。線は運動から生まれ、点の自己完結した、最高の静寂を否定することから生まれる。ここに静止的なものから動的なものへの飛躍がある。したがって線は、点という絵画的原要素に対する最大の反対物である。もっと正確に言えば、線は副次的要素と言え。 (中略) 点を線に変える外部からやってくる力は実にさまざまである。線の多様性はこの力の数と、その組み合わせに依存している

本研究では上記の論考を中心に「点」と「線」の関係に基づき考察を進めていく。

仮想事例1の考察

本事例では暴れている時間を分単位で詳細に尋ねることにより、クライアントとセラピストの間でクライアントの内的状態や深刻度の査定が可能となった。点数化により実際の状況に対するクライアントの主観を確認し、クライアントが問題を過大評価しているか過小評価しているかを吟味することにつながった。本事例で用いられている質問は10点満点で問う標準的なスケールとは異なりスケールを「時間」に置き換えた変種であったが、スケーリング・クエスションの「例外」への注目という効果は確認されている。問題が繰り返され続けている10分間のその先に広がる23時間50分の例外に目を向けることにも意義があったといえるだろう。クライアントの訴える程度から察するに、クライアントが有していたスケールは10分を最大値とし、しかも目盛り幅は10分刻みに設定されていた可能性がうかがえる。それは線分上を自由に移動可能な任意の点ではなく、もはやただの一つの動かざる静止的な大きな「点」と化していた。問題と接近す

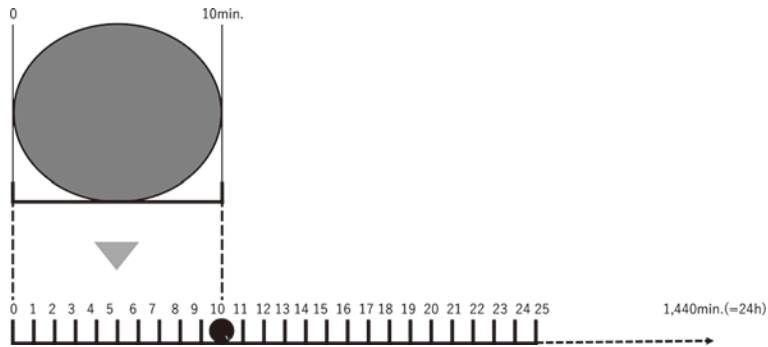


Figure 2. スケールの最大値と目盛りとの関係とその変遷

ぎていたクライアントにとって、問題は永遠であり世界のすべてであったのである。自ら解決のイメージなど抱くことは不可能な状態だったと言える。セラピストはそのようなこころの状態にあるクライアントに対して、24時間（1,440分）のスケールで捉える視点をもたらしした。残りの23時間50分（1,430分）の世界が突如として目の前に広がったに違いない。上記の変化を視覚的に示すと、Figure 2のような最大値と目盛りとの関係の変遷過程となる。

例外の語りもそうであるが、それがはじまるまでのステップも重要であった。点を打ち、その点が線分全体のどこに位置するかを確認することによって、「再定位」の感覚がもたらされたことに臨床的意義があったと考えられる。「再定位」とは一度わからなくなった自分や対象物の位置や方向を再び能動的に定めることである（多田・杉村，2009）。すなわち「自分はどこにいるか／どこを向いているか」という感覚が呼び覚まされることで、いままで動かなかった点は、1分単位で小さな目盛りを刻み始め、例外だった23時間50分は23時間51分へとゆっくりであるが確実に拡がっていく。点が動くということは前の点から次の点への移動であり、そこには時間的推移が生まれる。点の変動を話題にするとき、クライアントは時間の感覚も取り戻すことができたと推察される。こうした点の軌跡はやがて線となり、新たな物語を紡いでいく経過を辿っていくと考えられる。

仮想事例2の考察

本事例では明確な形でスケーリング・クエスチョンが導入されているわけではない。点数が登場しないのでスケーリングらしからぬ印象を覚えるが、本質的にはスケーリング・クエスチョンである。相対評価（個人間比較）、絶対評価（個人内比較）という前置きとく今回の震災はこれまでの人生の中でどれくらいの体験でしたかという問いの部分がそれである。本事例では質問それ自体に、クライアントが有していた個人間比較という前提を問い直す効果があったと考えられる。この事例においてもスケーリングによって「再定位」の感覚がもたらされたことに意義があったいえるだろう。ただ仮想事例1の動かざる点とは異なり、本事例のクライアントの点は個人間

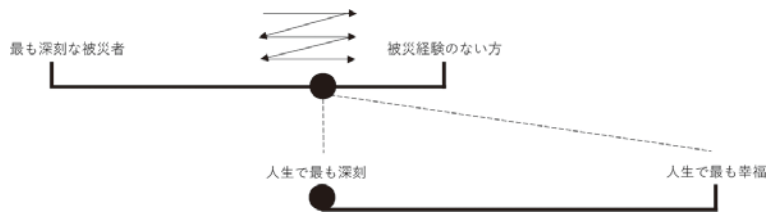


Figure 3. 個人間比較のスケールから個人内比較のスケールへの変更

比較のスケール上を右へ左へと定まることなく揺れ動くものであった。そこへセラピストからの質問によって、おおよその点の位置はそのままに、もう一つの個人内比較というスケールへと乗せ換える作業が行われたのである。その過程においてクライアントは個人内比較のスケール上で自分の立ち位置を再確認したものと考えられる。図示すると Figure 3 の通りである。

本事例ではクライアントの置かれた状況を他者との比較ではなく人生の物差しで測定し直す作業が取り組まれた。通常であれば10点満点の質問とその回答というやり取りへが続くが、三谷ら(2012)ではその後の記述が省略されている。省略の意味は、質問の投げかけまでで十分であることを強調するために他ならぬ。実際の面接においてもその後の展開が多く語られたわけではなく、どちらかというクライアントの内省にこそ意義があり、シングルセッションで終結している。

ここで仮にクライアントが一番深刻な10点と答えた場合を考えてみよう。定石通りのスケールリング・クエスチョンであれば、10点をいかに下げていくかという例外の探索の話題へと移っていくが、このケースにおいては、それは無用である。自身の体験を過小評価していたクライアントにとっては、一番深刻な10点と答えたならば、それはもっとも望ましい帰結であるからである。点数の増減を話題にするまえにセラピストが取り組むべきは「数値に潜在する意味の把握」(伊藤, 2017)なのである。これは数値に置き換えられた言語を再言語化する過程と言い換えることもできる。実際には本事例では10点という具体的な点数で表明されることはなかったが、クライアントの被災体験は人生で最も深刻であったことをセラピストが暗黙裏に共有していたために、以降は言語によるやりとりのみで実質的に点数を用いたことと同等になったのだと考えられる。ここでさらに心理臨床の観点による考察を重ねてみることにしよう。クライアントは東日本大震災により大地の凄まじい揺れを体験している。クライアントは、定位が定まらずに常に揺れている状態であったものと推察される。本事例においては点数の増減の話題などの揺れを扱うことよりも、むしろ点が定まることにこそ臨床的な意味があったものと考えられる。

最後にスケールリング・クエスチョンに関して技法論の立場から考察を加える。一つは、質問のなかで「点」と「線」の関係を扱うことが達成されれば、点数を用いずとも同等の効果が期待されると言うことである。スケールリング・クエスチョンで用いられる点数の本質は、「数」よりも「ポイント(点)」のほうにこそあったと考えられる。もう一つは、スケールリング・クエスチョンに

よる「点」と「線」との関係をめぐる対話は、例外的探索のためのステップではあるが、それに先行する「再定位」のプロセスに照準を絞るならば、ソリューション・フォーカスト・アプローチの一技法に留まらない可能性を含むものだと考えられる。

V. 総合考察

ここでははじめに仮想事例1と仮想事例2を「点」と「線」の持つ治療機序の観点から総合的に考察する。次に二つの仮想事例の考察を通して得られた新たな知見を基に、スケーリング・クエスチョンの技法としての深化の可能性を検討する。そして最後に本研究で扱うことができなかった限界について述べることにする。

点と線の治療機序

仮想事例1では、スケールの「起点から終点までの長さ」と「目盛りの大きさ」が等しいならば、それはもはや線ではなく静止的な大きな一つの点であることを確認した。問題に囚われているクライアントにとっては、問題は「問題から解決まで」のスケール上になく、問題が時空の全てと化した世界に生きている。問題に没入しすぎているため外側の景色は当然見えず、自分がどこにいるかを見失っている状態であった。「点」と「面」との関係で言えば画面いっぱい黒く塗りつぶされている状態と比喩的に表現できるだろう。クライアントはそれが点であることすら自覚できなかったことは想像に難くない。「自分がどこにいるのか／「自分はどこを向いているのか」を省察することは不可能であったと言える。

一方、仮想事例2は凄まじい大地の揺れにより世界が一変し、自己の立ち位置が大きく揺れ動くクライアントの事例であった。仮想事例1は、動きたくとも自発的に動けない重量感のある点であるのに対して、こちらの仮想事例2は逆に外界から容易く影響を受け、自分の意思とは関係なく動かされてしまう浮動する点であった。それぞれ「動かざる点」「動かざるを得ない点」という違いはあるが、いずれの事例も「自分がどこにいるか」という定位の感覚に乏しかったことに共通している。「点」が「線」との関係で語り直されることで、「再定位」の感覚がもたらされたと考えられる。

またこれらの仮想事例では「空間」だけでなく「時間」の感覚にも変化が認められている。仮想事例1では、24時間のスケールで且つ分単位の日盛りが刻まれ「本当に小さく小さくプラスの状態になったときの差異を聞いて」（黒沢，2018）いくことで、動かざる点が動き出した。点が動くということは前の点から次の点への移動であり、そこには時間的推移が生まれる。止まっていた時間が動き出したのである。逆に仮想事例2では定まらなかった点が定まるという変化が見られた。この場合の点の定まりは、時間の停滞を意味するのではなく、カンディンスキー(1926)が指摘した「句点を打つ」という意味での理解がよりふさわしいだろう。このクライアントは他

者との比較による過小評価と自己の感覚との食い違いによる葛藤から、堂々巡りの終わりなき語り
りに陥っていた可能性も考えられる。点が定まることで、個人間比較の線の終点が確定し、同時
に次なる個人内比較の線の起点が見出されたという意味で、一つの「ピリオド」だったと推定さ
れる。

以上を総括すると、線分上に点を定める段階は空間的な感覚と関連しており、線分上の点の移
動、すなわち描線の段階は、時間の感覚と関連しているということが示された。

スケーリング・クエスチョンの技法としての深化の可能性

先行研究ではスケーリング・クエスチョンが優れた「査定」の道具であること、そして「言語
による行動拘束」という治療機序を有することが確認されている。以降は本研究での仮想事例の
考察を通して得られた知見をもとに、スケーリング・クエスチョンの技法としての深化の可能性
について論じる。

- 1) スケーリング・クエスチョンは「スケール（尺度）」であるという特長を有している。本
研究ではスケールにおける最小値と最大値、そして目盛り幅という構成要素が抽出され、
これらを任意に設定していくことに治療効果があることが見出された。
- 2) スケーリングに内包されている「数」とは、単なる「数値」だけでなく「変数」のことで
ある。そのような意味でスケーリング・クエスチョンは「変化」を扱う臨床において理に
適ったものである。もっと言えばスケーリング・クエスチョンという道具それ自体が「変
化は可能であるばかりか不可避でもある」(de Shazer, S., 1985) というソリューション・
フォーカスト・アプローチの思想をまさに可視化したものとも言える。
- 3) スケーリング・クエスチョンは「点」「線」というデザインの構成要素からも成り立って
おり、「点」の静止的と「線」の動的という対極物が技法内に統合されている点に特徴が
ある。この「点」と「線」の緊密な関係がもたらす拘束の力によって変化のプロセスが促
進するようにデザインされているものである。
- 4) 「点」と「線」との関係に言及する対話によりクライアントに「再定位」の感覚がもたら
される。いったん「再定位」がもたらされると、それに伴って点は再び動きはじめ、線が
描かれていく。ブリーフセラピーで用いられるスケーリング・クエスチョンでは「変化」
を記述すべく線の軌跡や差異が強調されることが少なくないが、それに先行する点を定め
る段階にも臨床的な意義がある。描線に先行する「再定位」の段階は、ソリューション・
フォーカスト・アプローチの例外の探索のための起点ではあるが、それと同時に「自分は
どこにいるか／どこを向いているか」という感覚を賦活させるという意味で、心理臨床に
おける普遍的な治療要素である。

本研究の限界と今後の可能性

本研究ではスケーリング・クエスチョンに内在する点と線という構成要素とそれらの関係について吟味してきた。しかしながら点と線に関する考察は部分的なものにならざるを得なかった。以下、本研究の限界について述べる。

1つ目は、スケールの最小値と最大値の意味付けについて本研究では扱えなかった。仮想事例2の「一番深刻な10点がもっともよい」という逆説的評価は、スケーリング・クエスチョンの問題一解決という二元論には当てはまらない帰結であった。今後は逆説性や数値の再言語化に関する考察を進めていく必要があると言える。

2つ目は、本研究が対象とした線は「直線」のみであったということである。スケーリングとは「数直線」であり、いわゆる「数」の「直線」であるが、カンディンスキー（1926）によれば「直線」に対比されるものとして「曲線」を挙げている。そこでは曲線と直線は根源的に対立する一対の線であるとも述べられている。今後は、スケーリングが直線であることの効用と限界、曲線の一形態である円についての臨床的検討、曲線を文字通り心理臨床に活かしたドナルド・ウィニコットのスクイグル技法なども含め、「線」に関するさらなる検討が求められる。

3つ目はカンディンスキーの『点と線から面へ』という主題の「面」の部分についても、本研究では部分的にしか扱うことができなかった。心理臨床において「面」という語で連想されるものは、ほかでもない「面接」である。「面接とは何か」を「点」「線」「面」との関係から解き明かしていくことも今後の課題である。

引用文献

- Berg, I.K., & de Shazer, S. 1993 Making numbers talk : Language in therapy. In S. Frieden (Ed.) *The new language of change : Constructive collaboration in psychotherapy* (pp. 5-24). New York : Guilford Press.
- Breg, I.K., & Miller, S.D. 1992 *Working with the problem drinker : A solution-focused approach*. New York. : W.W. Norton & Company. (インスー・キム・バーグ&スコット・D・ミラー著 斎藤学(監訳) 1995 飲酒問題とその解決 金剛出版)
- De Jong, P., & Berg, I.K. 1998 *Interviewing for solutions*. West Virginia : International Thomson Publishing Inc. (ピーター・ディヤング&インスー・キム・バーグ著 玉真慎子・住谷裕子(監訳) 1998 解決のための面接技法—ソリューション・フォーカスト・アプローチの手引き— 金剛出版)
- de Shazer, S. 1985 *Key to solution in brief therapy*. New York : W.W. Norton & Company.
- Estrada, B., & Beyebach, M. 2017 Solution-focused therapy with depressed deaf person. *Journal of family Psychotherapy*, 18, 45-63.
- 長谷川啓三 1987 リフレーミングとMRI派 現代のエスプリ 242 至文堂 pp 107-117.
- 長谷川啓三 2005 臨床の語用論とは? 現代のエスプリ 454 至文堂 pp 5-17.
- 伊藤拓 2017 ソリューション・フォーカスト・ブリーフセラピーの質問の用い方のポイント—熟練

- したセラピストへの面接調査による質的検討— 教育心理学研究 65 巻 1 号 pp 37-51.
- Kandinsky, W. 1926 *Punkt und Linie zu Fläche*. Verlag Albert Langen, München. (ヴァシリー・カンディンスキー著 宮島久雄訳 点と線から面へ ちくま学芸文庫)
- 黒沢幸子 2018 スケーリング・クエスチョンの基本的な進め方のポイント 月刊学校教育相談第32巻8号 pp 10-13.
- Lloyd, H., & Dollos, R. 2008 First session solution-focused brief therapy with families who have a child with severe intellectual disabilities ; Mothers' experiences and views. *Journal of family therapy*, 30, 5-28.
- 三谷聖也・三谷理絵 2012 学校カウンセラーとしてのソリューション・バンク 子どものこころと学校臨床第6号 遠見書房 pp 20-29.
- 三谷聖也 2019 ブリーフセラピーの技法Ⅱ—スケーリング・クエスチョンとその応用— 短期療法を学ぶ会仙台第五回定例セミナー資料.
- Skidmore, L.E. 1993 *A follow-up of therapists trained in the use of the solution focused brief therapy model*. Vermillion : Unpublished doctoral dissertation, University of South Dakota.
- 多田幸子・杉村伸一郎 2009 模型空間における幼児の再定位—幾何学的情報とランドマークの利用ならびに身体移動の効果— 発達心理学研究第20巻第2号 pp 134-144.